

看護研究の支援 — 文献検索講習会をとおして考えたこと

高橋眞由美

I. はじめに

病院図書室司書として10年近く仕事を続ける中で、かねてから看護師へのサービスを充実させたいと考えていた。特に文献検索については、基本的な内容のガイダンスの必要性を感じていた。折りに触れて簡単に検索方法を説明することはあっても講習会を正式に行ったことはなかった。日頃、看護研究のために図書室を利用する看護師を見ていると、新人であっても抵抗なくパソコンに向かって検索をする看護師が増えて来た一方、雑誌棚の前でやみくもに雑誌ページを繰る場面を目にすることもよくある。日常の会話の中から検索データベースを活用していない、また使い方を知らない看護師も少なくないことがうかがわれ、情報収集のためのスキルの差が気になっていた。

上司である図書室長を兼任する看護局次長にその話をすると、それぞれの出身学校の学習環境が違うから無理もないことだと言われた。しかし、出身学校の違いはあれ同じ職場で働いているのであるから、せめて図書室機能は皆が同じように使えるようになってほしいと思い、文献検索講習会を行うことを考えた。

2011年度末に上司にこの意向を伝えると、看護局で検討が行われ、ぜひ開催してほしいとの返事をいただいた。2012年度に入り、4月の下旬には看護局長から講習会の講師依頼の文書をいただき、5月1日から始めてほしいということで早速準備に取りかかった。看護局教育担当

部長に調整窓口になってもらい計画を進めた。

II. 講習会の受講対象者とねらい

当院では約600名の看護師が働いている。看護局が受講希望を募った対象者は、各部署（各科病棟、手術室、ICU、外来など）の「看護研究のための文献検索を学びたい看護職員」である。受講のねらいは、「看護研究の文献検索方法を理解し看護研究に活かす」ことである。

III. 講習会の計画

忙しい看護師が集まることのできる時間帯と受講できる時間を考えることが第一の問題であった。看護局教育担当部長と検討した結果、基本的に勤務が終わる夕方に、あまり長くない時間で行うことになり、終業の17時15分から45分までの30分間で行うことにした。

私がひとりでカバーできる人数とパソコンの台数を考えて、1回の受講者は5人程度にした。パソコンは図書室には7台あるが、ほかの利用者のこと、データベースの同時アクセス数のことなど考え、2台のパソコンを使って講習することにした。

IV. 講習の内容

講習時間が30分間であるので、短い時間をいかに有効に使うか考えた。まず看護関係図書・雑誌、看護師が利用するデータベースについてごく簡単に紹介した。メインは検索の実技であるが、自分の経験から実際に自ら検索してみなければ理解できないことがわかっていたので、時間が許す限り検索の実技をしてもらえるよう

講習を進めた。

実技で利用したデータベースは、検索関係は医中誌 Web、JDream II、最新看護索引 Web、の3種類、電子ジャーナルでは、メディカルオンラインとJ-STAGEの紹介をした。

図1は、受講者に配布した資料の一部である。

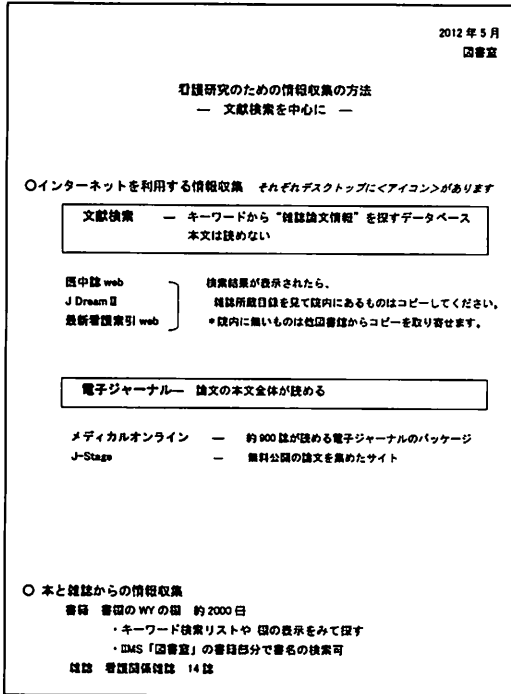


図1 講習会レジュメ

いつも感じることであるが、図書館業務をしている者は、「検索データベース」と「電子ジャーナルデータベース」の違いは当たり前理解できるが、多くの利用者は、その違いが理解できていないことに気がつく。そのため、このような資料を作って違いを視覚化して整理してみた。文献検索のデータベースは（リンクアウトは別だが）、基本的に本文を読むためのものではなくキーワード入力により該当論文の掲載雑誌を見つけるためのものであること、一方、電子ジャーナルはすぐに本文が読めるものであること、を説明している。

また、検索結果から論文を入手する方法について説明した。当院の所蔵目録を見て所蔵があ

るものはすぐに図書室でコピーできること、また、所蔵していない雑誌については図書室担当者が他機関へ依頼しコピーを取り寄せるのでその手続きについて説明した。

V. 講習会の様子

受講希望者は43名で、毎日5名前後で延べ8日間講義を行った。受講者は年齢も経験もさまざまであり、データベースの利用の経験もさまざまであった。説明しながら様子をみていると、先に述べたとおり、検索データベースと電子ジャーナルの違いがよくわかっていない受講者が少なくなかった。

検索データベースについては、医中誌 Web の利用経験がある受講者は多かったが、JDream IIの方は少なかった。両方とも時間の都合上、基本モードのみ説明し、絞り込みについては年の絞り込みとキーワードをスペース入力で掛け合わせる程度にした。キーワードは広義の単語、狭義の単語によりヒットの件数が全く違うことなど、実際に入力・検索して実感してもらった。最新看護索引 Web は、導入したばかりの時期でもあり、簡単な検索方法と日本看護学会論文集の閲覧について説明した。

電子ジャーナルについては、まずメディカルオンラインについて説明した。この商品は、予想以上に好評であった。やはり、すぐに論文が読めて印刷もできることがたいへんな魅力であるようだ。「今日のお土産!」と言って、研究中のテーマの論文を印刷して持ち帰る受講者もいてほほえましかった。

J-STAGEについては、ヒットする文献は限られるが自宅でも使えるデータベースであるので、検索の練習という意味でも利用を勧めておいた。

講習会は30分間であったが、その後も時間がある参加者は残って検索の続きをしていた。

VI. 講習会を終えて

初めての看護師対象の文献検索講習会である

ので、興味を持って聞いてもらえるような進行ができるか心配していたが、参加者はやる気がある者ばかりでいずれも熱心に取り組んでいた。

検索して求める結果がヒットするかどうかは、ひとえに「キーワード」によるが、慣れていないと適切なキーワードが思い浮かばないものだ。「とにかく使って慣れてください。」と話した。慣れるといろいろな使い方がわかってきて、例えば、ヒットした文献に索引されているキーワードを利用して、置き換えて検索し直したりすることもできる。検索を重ねるうちに感覚がつかめてだんだん正確な情報をヒットさせられるようになる。参加者には、図書室は夜間でも利用できるので時間のある時に来て検索に慣れてくださいと話した。

看護師と話していつも感じるのは、(私の)看護の用語についての知識の不足である。基本用語はもちろんのこと、次々と新しい用語が誕生するため、検索の場面でも、看護師の要望に応えられないことも起こるかもしれない。日頃から、新着雑誌受け入れの時などを利用して、意識して知識を増やすことが必要だと思った。

毎日、講習会の後で参加者にアンケートした。ほとんどの参加者が研修の目標はおおむね達成できたと回答していたので安心した。参加者の感想として、少人数でパソコンが使えてよかったというものと、時期的にもう少し早い時期に行ってほしいというものがあった。運営の設定については、講師1人、参加者5人前後、パソコン2台という方法は悪くなかったようである。開催時期については、看護研究の時期との調整が必要であることがわかった。

文献検索講習会は今後も継続していきたいと考えている。初心者対象、また基本部分をマスターした中級者対象、それぞれのコースが必要になるだろう。有意義な講習会にするために、教える側も研鑽を心がけたい。

日頃感じることであるが、毎日のように図書室に来る看護師がいる一方、ほとんど利用することがない看護師も少なくないように思える。いろいろな機会を捉えて、図書室のPRが必要だと思っている。図書室は「お得がいっぱい」の場所である。すなわち、長い時間かけて諸先輩から有用だと認められた書籍や雑誌を見ることができ、情報源へ迅速にアクセスできるweb商品を使え、また、資料へのナビゲーターである司書がいる。図書室をもっと気軽に利用してもらうにはどうしたらよいか、これはたいへん難しくもやりがいのある課題である。

ふだんから、文献複写を依頼してくる看護師には、少しでも役に立てばと思い、取り寄せ依頼作業の途中で見つけた論文などを“おまけ”につけたり、フリージャーナルの存在を書き添えたりしている。サービスをしようと思うなら、何かを依頼されるのを待っているだけではなく、能動的にこちらから働きかけることが必要だと思う。気がついたことをひとつずつ試みていきたい。

今回の講習会を行ってみて、講義をするということはこちらから与えるという面だけでなく、新たに気づくこと、また教えられることがあるということを改めて認識した。

この経験を今後のサービスに生かしていきたいと思う。